

2017. 7. 7

日本コミュニケーション学会 九州支部



ニューズレター No. 29

目次

1)巻頭言 熊本・大分地震から1年が過ぎて (支部長:池田理知子)

2)今年度の活動予定

- ①記憶の継承—未来を見据えながら、過去を語り継ぐという事 第24回支部大会を前に
(大会実行委員長:畠山均)
- ②支部紀要第15号の経過報告 (紀要担当運営委員:平野順也)

3)会員からのメッセージ

英語の学習困難に挑む ~先天的な要因に特化した研究の進展 (宮崎大学 榎山桐加)

4)支部会員の紹介

- ①自己紹介にかえて ~私の研究テーマ
(長崎大学 矢野香)
- ②会社員だった私が「対人コミュニケーション研究」に興味を持った理由
(西南学院大学大学院 博士後期課程 志岐早苗)
- ③私の研究テーマ:ディベートにおける証拠資料に関する考察
(九州大学大学院 博士後期課程 張小英)

5)年次大会報告:九州支部パネルの感想

- ①九州支部パネルに参加して (新潟医療福祉大学 五十嵐紀子)
- ②「水俣から始まった『戦争』を考える九州支部でのシンポジウム」に関する所感:
いま・ここを生きる指針となる歴史との邂逅 (順天堂大学 石黒武人)

6)書評

池田理知子・伊藤三男(編)『空の青さはひとつだけ:マンガがつなぐ四日市公害』
(熊本大学 平野順也)

7)編集後記

1)巻頭言

熊本・大分地震から1年が過ぎて

支部長：池田 理知子（国際基督教大学）

九州支部長となって2期目の最初のニューズレターです。まず、1期目のことを振り返ることから始めたいと思います。やはり何といても、2016年4月14日と16日に熊本・大分を襲った震度7の地震が九州支部に少なからず影響を与えたことを忘れることはできません。地震直後の義援金の呼びかけとそれに応じてくださった多くの方々の支援のお気持ち、当初は開催を危ぶむ声も上がっていた10月の熊本大学での支部大会の開催。いまでは遠い昔のような気がします、あれからまだ1年と数か月しか経っていません。

私事ですが、母の介護の関係で去年の9月から今年の3月まで熊本市内のマンションの1室を借り、東京と熊本を行ったり来たりの日々を過ごしました。そのときに目の当たりにしたのが、震災後の「復興」がなかなか進まない様子でした。私たちが一時的に居を構えた場所は、市内でも被害がわりと大きかったところとはいえ、ほとんどの家屋が同じように被害を受けたというわけではなく、その程度や影響はさまざまでした。また同じように、「復興」の進捗も、被害が甚大だった家屋の取り壊しは比較的早くに進められて

いたようですが、たとえば私たちが借りていたマンションの出入り口の壁と床の亀裂や剥がれ程度だと、今年の3月になってようやく修復工事が始まるといった具合です。このように大きなところから修復が進むため、一見すると「復興」が順調に進行しているように感じますが、細部に目をやるとまだまだなのです。まさにこれからがたいへんなのではないのでしょうか。熊本大学での支部大会で、あえて71年目にあの戦争が何だったのか、そのことをどう語り継いでいけばいいのかを議論したように、1年が過ぎたいまだからこそ熊本での地震が私たちに与えた試練の意味を問い直し、これからも考え続けていく必要があるのではないかと考えています。今度の9月の長崎での支部大会とも共鳴し合う課題ではないのでしょうか。

さて、今期の支部運営は下記の体制で行います（敬称略）。メンバーの変更はありません。これからも、運営委員の皆様および支部の会員の方々と共に九州支部を盛り上げていくために頑張りたいと思っておりますので、ご協力をよろしくお願い致します。

副支部長	清水孝子	(日本文理大学)
事務局長	筒井久美子	(立命館アジア太平洋大学)
副事務局長	丸山真純	(長崎大学)
運営委員		
総務担当	畠山均	(長崎純心大学)
ホームページ担当	青柳達也	(佐賀大学非常勤講師)
研究紀要担当	平野順也	(熊本大学)
ニューズレター担当	横溝彰彦	(久留米工業高等専門学校)
会計監査	井上由美	(非常勤講師)
	鳥越千絵	(西南学院大学)

2)今年度の活動予定

①記憶の継承ー未来を見据えながら、過去を語り継ぐという事 第24回支部大会を前に

大会実行委員長：畠山 均 (長崎純心大学)

第24回九州支部大会を9月23日(土)、純心女子高等学校江角記念館(長崎市文教町)で開催します。現在、研究発表の申し込み受け付け中です(締め切りは7月15日)。今大会のテーマは「記憶の継承ーコミュニケーション学の視点から」です。2年前から九州支部大会では「公害」「戦争」「記憶」をキーワードに議論を深めてきましたが、その流れを受け継ぎ、今年の大大会では長崎での被爆体験をどう未来に継承していくか、この課題に対して私たちコミュニ

ケーション研究者はどのように向き合っていくべきかを考えたいと思っています。1945年8月9日の長崎への原爆投下から72年が経過し、被爆体験を実際にお持ちの「語り部」の方々が高齢で引退されていく中で、悲惨な被爆体験をどのように未来に伝えていくかは長崎だけではなく日本全体の喫緊の課題です。

この課題についての議論を参加者と深めるために今大会では講演は開催せず、異なった視点から大会テーマに迫る2つのパネルディス

カッションを準備しています。その一つは大会テーマと同じタイトルの「記憶の継承ーコミュニケーション学の視点から」です。3名のパネリストにご登壇いただき、それぞれの体験とそれに基づいた思いを語っていただきます。最初のパネリストは純心女子高校で長年、公民科の教員としてこの問題を語ってきた新海智広先生です。新海先生には高校教員の立場から教育現場でどのようにこの問題を扱ってきたかをお話ししていただく予定です。次のパネリストである田代雅美さまは元小学校教員で現在、「平和案内人」という立場で、原爆資料館の案内や碑巡りのガイドなどをされています。観光客や修学旅行生に被爆の実相をどう伝えていくかという問題と日々葛藤されています。最後のパネリストは私が勤務する長崎純心大学英語情報学科1年生の松野世菜さんです。彼女は次世代の語り部を育てるプロジェクトに参加し被爆体験を未来に語り継いで行こうと積極的に活動しており、その一部が[2017年6月25日の長崎新聞](#)に掲載されました。以上3名の方々にそれぞれの立場から「記憶の継承」について発表していただき、会場の皆さんと議論を深めたいと思っています。司会は九州支部長の池田理知子先生が担当されます。

もう一つのパネルディスカッションは「被爆体験継承における異文化理解」(仮称)と題し、

被爆体験や平和学習における外国人の存在に焦点をあてたものです。新海先生に再度ご登壇いただき、外国人被爆者の問題についてお話しいただきます。また、南イリノイ大学カーボンデイル校コミュニケーション学科の豊崎智先生からは、アメリカ人大学生の広島での平和学習についてお話しいただく予定です。さらに、企画者である久留米高専の横溝彰彦先生が、今回の支部大会開催地である純心女子高校で国際交流に携わられた経験を回顧し、アメリカ人高校生と韓国人高校生の長崎での平和学習についてお話しいただきます。

長崎の地で九州支部大会を開催するのは1994年、2001年、2008年、2013年に続き、今年で5回目になります。これまでの大会は長崎純心大学で開催されましたが、今年は附属高校である純心女子高校内にある江角記念館を会場に行きます。この建物は純心学園に現存する建物では最も古い建物です。また現在の高校キャンパスは原爆投下の爆心地から直線距離にして約1kmの距離にあり、原爆投下から多大な被害を受けました。このような歴史を持つ今回の支部大会開催地はその大会テーマにふさわしい場所であると思います。多くの会員の皆様は秋とはいえ、まだまだ夏の名残りをあちこちで感じる事ができる長崎にお越しくださることを心より祈念し、お待ちしております。

2017（平成 29）年度 第 24 回支部大会

1. 日時：2017 年 9 月 23 日（土）
 2. 場所：純心女子高等学校 江角記念館（長崎市文教町 13-15）
 3. 大会テーマ：「記憶の継承ーコミュニケーション学の視点から」
 4. 大会実行委員長：畠山均
 - 研究発表者を募集します ●
- 研究発表の申込み締切：7 月 15 日（土）
- ※大学院生の研究発表に対しては補助金を給付します。

2)今年度の支部活動予定

②支部紀要第 15 号の経過報告

紀要担当運営委員：平野 順也（熊本大学）

昨年度から、紀要委員長を担当させていただいている平野です。『九州コミュニケーション研究 第 15 号』の経過報告をさせていただくまえに、まず前号の編集にあたり、協力していただいた先生方に、そして論文を執筆していただいた先生方に対し、この場を借りてお礼申し上げます。九州支部が他の支部に見られないような独自の取組を行うことが可能なのも、先生方一人ひとりのお力添えのおかげです。何かとご迷惑をおかけいたしました。前号を發表することができたのも、ひとえに先生方のおかげです。重ねてお礼を申し上げます。

さて、『九州コミュニケーション研究 第 15 号』ですが、最終的にはお一人の方からの投稿のみとなりました。執筆していただいた先生に

査読結果をお渡しし、現在修正を行っていただいている次第です。また、10 月 22 日、第 23 回日本コミュニケーション学会九州支部大会が、「記憶と未来：71 年目からの戦争史」をテーマに熊本大学で開催されましたが、その第 2 部で行った基調講演とシンポジウムを、特別企画として掲載いたします。

この特別企画は前号から始まったものです。一昨年、水俣市で「公害とコミュニケーション」をテーマに開催した支部大会での基調講演や支部大会に参加された先生方から貴重な論文を寄稿していただきました。今年度は、長崎で支部大会が開催されます。支部大会のご案内は畠山先生にお譲りしますが、第 16 号では再び支部大会のテーマに合わせた特別企画をご用意

意させていただきます。第 14 号から始まったシリーズとしての「特別企画」にご期待ください。

最後に、経過報告には直接関係ないことかと思われるかもしれませんが、ご報告とお願いを申し添えさせていただきます。

まず、京都で開催された第 47 回日本コミュニケーション学会では、九州支部パネルが行われました。そこでは、「コミュニケーション学と『社会』の接点」を構築する先生方の取組が紹介されました。まさしく、『社会』との接点の構築こそが、「特別企画」シリーズに還流するテーマだといえます。このパネルも「特別企

画」の一部として紹介させていただくかもしれません。

そして、恐縮ではございますが、私から皆様にお願ひがあります。投稿論文数ですが、近年寂しいように感じます。私が紀要委員という大役を引き受けたのは、このような取り組みは「祭り」であって、一人ひとりの参加によって成り立つものだと述べられた、ある先生のお言葉に鼓舞されたからです。これからも、九州支部の紀要が魅力的な「祭り」を継続していくためにも、一人でも多くの先生方の参加をお願いしたいと思います。

3) 会員からのメッセージ

英語の学習困難に挑む ～先天的な要因に特化した研究の進展

櫛山 桐加 (宮崎大学)



平成 28 年度科学研究費助成事業 (挑戦的萌芽研究) に『英語を学習する日本人に英語のみ読み書き困難が出現する可能性の調査』が採択された。筆者は自身の英語学習経験から長年「英語ができないのは努力不足」と考えてきた。それが平成 21 年に大学の英語教育に関わるようになり、どれだけ時間をかけて丁寧に指導しても基本的な英語力すら身につかない者が毎

年一定の割合で出ることによって悩まされることになった。「勉強の仕方が悪い」あるいは「やる気がない」という言葉で片づけていいのだろうか？

以来、英語スローラーナーに関して研究を続けてきた筆者が読字障害 (ディスレクシア) という概念に行きついたのは平成 25 年のことである。英語母語話者の読字障害の症状は、英語

学習が極端に困難な日本人の状況と酷似していた。第二言語習得論の研究では教授法や動機付け、学習環境など後天的な要素が中心となるが、認知心理学のように学習者が持つ先天的な特性を考慮する必要があると思いついた。

学習障害の8割を占めるとされる読字障害は、日本語より英語で出現率が高いとされる。Wyde11 (1999) では、英語母語話者が英語では読字障害の症状を見せるが、第二言語の日本語では読字障害が見られない事例が紹介されている。

日本語で読字障害がある場合、英語学習は困難を極める(村上・吉田、2016)。日本語で読字障害が見られない学習者にも、中学生になって英語学習に深刻な困難を抱えることがあり、この場合、例えば漢字の学習が苦手など、日本語で軽度な読字障害がある可能性が高い(原、2016)。軽度の読字障害を特定することができれば、英語学習が困難になるリスクのある学習者を予測できると考え、科研費の申請に至った。

科研費では英語圏および日本で読字障害の診断に使われる検査を購入した。様々な検査を実施しているが、既存の検査は重度の事例は検

出できても軽度の場合は特定が難しい。また、研究を進めるうちに申請時の知識不足も露呈してきた。例えば、課題名を「読み書き困難」としたが、読字障害と書字障害は本来別の障害であり、実質的に読字障害を中心とする研究に「読み書き困難」とつけるのは適切ではない。さらに学習困難を引き起こす要因に、自閉症特有の言語認知の問題や文法で困難を示す特異的言語障害など、読字障害以外の要因を考慮する必要があった。いずれも標準化された検査方法は確立されておらず、個別の事例を丁寧に洗い出す必要がある。

研究が進めば進むほど新たな壁にぶつかることを繰り返し、ゴールはまだ見えてこない。私の力量では解明しきれない問題は多いが、そのような問題があることを特定できたという点では一定の評価ができるかもしれない。

最後に、British Dyslexia Association が「読字障害により外国語を限定的にしか習得できないかもしれないが、異文化や他の共同体について意識が高まるにつれ視野が広がる」と外国語の学習を奨励していることを紹介して結びの言葉に代えたい。

参考文献：

Wyde11, T. N. & Butterworth, B. L. (1999) A case study of an English-Japanese bilingual with monolingual dyslexia. *Cognition* 70, 273-305.

櫛山桐加（2016）「書字と注意集中困難を持つ学習者に適切な英語指導法の開発および教室環境への提言」櫛山桐加・佐藤良子・吉田真樹子『発達障害の生徒への英語の読み書き指導 ～つまずきの傾向の把握と指導の工夫～』日本LD学会第25回大会,自主シンポジウム

原恵子（2016）「日本語における読み書き障害」日本LD学会第25回大会 大会企画シンポジウム『言語の違いによる読み書き障害とその支援』

村上加代子・吉田真樹子（2016）「通常学級に在籍する読み書き困難の小・中学生 2 事例への英単語読み指導」日本LD学会第25回大会,自主シンポジウム

4)支部会員の紹介

①自己紹介にかえて ～私の研究テーマ

矢野 香（長崎大学）



皆様、はじめまして。長崎大学の矢野香と申します。本学会に入会させていただいたのは2015年1月という新米です。なかなか日程が合わず学会にも参加したことがないため、「はじめまして」の先生方ばかりかと存じます。にもかかわらず、このような機会を与えていただき感謝申し上げます。せっかくの機会ですので自己紹介としてメッセージを書かせていただきます。

私の専門はスピーチ・プレゼンテーションです。とくに口頭コミュニケーションのなかの非言語（ノンバーバル）スキルについて研究しております。分類としては「演説」と「スピーチ・

コミュニケーション教育」になります。とはいえ研究者としてもまだ新米で、2014年に現職に就く前は放送局でアナウンスの仕事をしておりました。NHKで主にニュース報道番組を担当し、九州では福岡局や長崎局に勤務いたしました。

あるニュースについて伝えるとき、アナウンサーは全国各地で同じ原稿を読みます。しかし、その伝わり方やわかりやすさはアナウンサーによって差が出ます。言語表現が一緒でも、非言語表現によって違いが出るわけです。NHKでは、日本で最初に開局した放送局として90年を越す歴史の中で培われたアナウンススキ

ルが受け継がれていました。そのスキルを一般の方々にも日常で使ってもらいたい。そのためには、再現性あるスキルとして体系化するための科学的な検証が必要だと感じ、在局中に大学院に社会人入学。心理学の見地から研究を始めました。コミュニケーション場面における対人認知や行動分析を使ったスピーチスキル訓練法の開発を行っています。前者は、診察室における医師と患者のコミュニケーションについて、後者は、スピーチで他者評価のあがる要因とそのスキル訓練法を開発しています。

大学では、学部生・院生に対するプレゼンテーションの講義のほか、初年次教育としてコミュニケーション論、マスメディア論、キャリア教育科目の講義も担当しています。日々、学生と接する中で課題と感じるのは、コミュニケーション場面での非言語能力不足です。

毎年、長崎県内にある 10 大学の日本人学生と留学生が参加するプレゼンテーション大会を開催しています。日本語や英語などの言語を使って、およそ 200 人の観客の前でプレゼンテーションを行います。プレゼン自体は練習の成

果が発揮され、どのプレゼンターもまずまずの出来栄です。しかし真の実力が問われるのは、その後の質疑応答です。各大学の学長が審査員として並び、さらに深く質問したり、論点の矛盾について指摘したりします。そのときに緊張して混乱した日本人学生によくみられるのが「固まる」という現象です。頭で考え、口だけで、つまり言語だけで答えようとしてしまいます。それに対し留学生たちは、日本語能力が不足していても、身振り手振りを加えながら豊かに自分の考えを伝えようとします。私はその様子をみるといつも「この姿こそがコミュニケーションの原点だな」と思います。日本人が不得意とされている非言語スキルが、世界で活躍するグローバル人材を育てる基盤の一つではないかと考え、そのスキルをあげるための訓練法を研究しているところです。

この春、Ph. D. を取得し、研究者としてやっ
とスタート地点に立ったところです。会員の先生方にはぜひいろいろとご教授いただきたく、
よろしくお願ひ申し上げます。学会等で実際にお会いする日を楽しみにしております。

4)支部会員の紹介

②会社員だった私が

「対人コミュニケーション研究」に興味を持った理由

志岐 早苗（西南学院大学大学院 博士後期課程）



大学院でコミュニケーションを学ぶ前、私は
広告代理店に勤務する会社員でした。なぜ広告
業界を就職先に選んだのか、それは授業でのあ
る経験がきっかけでした。

私は、アメリカのウィスコンシン大学で、イ
ンテリアデザインを専攻し、作品のプレゼンテ
ーションを行ってきました。満足できるような
プレゼンはなかなかできませんでしたが、それ
でも、作品の意図は相手に届いていると思って
いました。しかし実際のところ、自分が思っ
ていたようには伝わっておらず、それどころか間
違った理解をされていることもありました。相
手に伝えるにはどうすればよいのかを考え、実
践したところ、周りが作品について理解や興味
を示してくれるようになりました。それをき
っかけに、「人に伝えること」を仕事にしたいと
思い、さまざまなメディアを使用し、人にメッ
セージを伝えることができる広告代理店に入
社しました。

その後、広告・マーケティングの仕事に 10
年以上携わりましたが、日々状況が変化し、予
期せぬトラブルが起きるため、慌ただしい毎日
を送っていました。簡単だと思える仕事は何一

つありませんでしたが、その中でも私が一番難
しいと感じていたのは、一緒に仕事をしている
人たちとの「コミュニケーション」でした。私
は営業担当として、クライアント対応、スケジ
ュールおよび予算管理、そしてチームの売上に
責任を負う立場にいたため、あらゆるスタッフ
と関わらなければなりません。スタッフ
もまたそれぞれの役割を担い、そして営業職の
私とは異なる立場で仕事に関わっていたため、
私たちはよく衝突しました。当たり前ですが、
自分の主張をするだけでは仕事は進みません。
苦手な人もたくさんいましたが、とにかく相手
と直接話をして、相手が反応するスイッチを探
すようにしていました。それを繰り返すことで、
自分がそれまで気づかなかった相手の一面を
知り、最終的には、「この人だから一緒に仕事
がしたい」と思える仕事仲間も増えていきまし
た。私は異なる価値観を持つ数えきれない人々
と出会い、広告制作というプロセスを共有した
ことで、メッセージの交換だけではなく、互い
を理解し合い、人間関係を築くこともまた重要
なコミュニケーションであると痛感しました。

私は、会社員として生きていくことに対して

特に疑問を感じることもなく、「これからも広告の仕事をしていくのだろうか」と漠然と思っていました。しかし、日々の業務を通して、コミュニケーションに悩みながらもその面白さを知り、さらに「コミュニケーション学」という学術分野に出会ったことで、コミュニケーションを主観だけではなく客観的にも追究したいと思い、コミュニケーション研究の世界に飛

び込みました。私は随分と遅れて、コミュニケーション研究と出会いましたが、これまでの経験は私には必要な回り道だったと考えています。今後はコミュニケーション研究を通じ、現代社会に生きる人々に対して貢献できることを見つけ、それを追究していきたいと思っております。今後とも宜しくお願いいたします。

4)支部会員の紹介

③私の研究テーマ：

ディベートにおける証拠資料に関する考察

張 小英（九州大学大学院 博士後期課程）



九州大学大学院地球社会統合科学府博士 1 年生の張小英と申します。昨年、日本コミュニケーション学会に入会し、九州支部に所属させていただくことになりました。現在日本語ディベートにおける証拠資料について研究をしています。研究は修士課程より続けてきましたが、実際のディベートの経験がほとんどないため、まだ勉強中です。ディベートは批判的思考力だけではなく、コミュニケーション能力を養成する手法としてもよく取り上げられています。

アメリカの大学では、コミュニケーション学科による教育の一環としてディベート学の授業が設けられていますが、日本ではディベート

の指導に携わるコミュニケーション研究者・教育者は一握りしかいないようです。ディベートの授業を開講している大学は本当に少ない状況です。私の指導教員（井上奈良彦教授）はアメリカで博士号を取得され、現在、ディベートや議論におけるコミュニケーションの特徴と議論教育との関係について研究を行っていらっしゃいます。また、九州大学では毎学期授業や講義、大会開催、合宿を含めてディベートの指導が行われています。このような環境で研究を進めることができるのは、幸せなことだとしみじみ感じています。

ディベートの研究をしようと決めたのには

一つ理由があります。東アジアの国々で、日本語学習者上位 3 つの国のうち、中国のみ 2015 年まで正式な日本語ディベート大会は実施されていませんでした。日本語を教える教員は年々増加していますが、日本語ディベートを指導できる教員は中国のみならず韓国、台湾にも少人数しかいないということが、2016 年、2017 年の国際ディベート教育研究会で大きな問題点として取り上げられました。グローバル化する社会において、第 2 言語としての日本語ディベートのトレーニングは、日本語操作能力の向上だけでなく、情報収集・活用能力、客観的な根拠に基づく論理的・批判的思考力の育成においても重要な役割を果たしています。そのような理由から、私はこの点を踏まえ、修士・博士課程で身につけてきたディベートの知識を生かし、今後中国における日本語ディベートの普及および指導に貢献したいと考えています。

ディベートを行う際、主張の根拠としての証拠資料を信頼できる文献から引用し、議論をし

なければなりません。したがって、証拠資料はすべての議論の基礎であり、ゲーム性を持つディベートの勝敗を大きく左右します。ところが、私の修士課程の研究から、ディベーターは勝利の追求や引用の指導不足などのために、証拠資料を適切に引用していないことがあると分かっています。また、彼らは証拠資料を見つける前に、資料の信憑性や合理性などもあまり吟味していないということが実施したアンケート調査の結果から分かりました。博士課程では、このような問題を踏まえ、今後より良い議論及び論理的なコミュニケーションを目指す教育のための研究として、ディベートにおける証拠資料の具体的な使用状況、問題点、それに対する解決の方法を明らかにすることを目的としています。

私の研究に皆様のご意見をいただければ幸いです。九州支部の皆様、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

5)年次大会報告：九州支部パネルの感想

①九州支部パネルに参加して

五十嵐 紀子（新潟医療福祉大学）

私は東北支部の所属だが、毎年夏が終わる頃になると、足が自然と九州方面に向く。九州支部の皆さんの懐が深いことはもちろんなのだが、毎年訪れて何かを確認しなければならない気分させられる。その何かは何なのか、今回の JCA 年次大会での九州支部パネルで少しわかった気がした。

第 47 回年次大会二日目の午後に行われた九州支部パネルのテーマは、「水俣から始まった『戦争』を考える九州支部でのシンポジウムーコミュニケーション学と『社会』との接点を探るー」であった。池田理知子先生（国際基督教大学）、畠山均先生（長崎純心大学）、清水孝子先生（日本文理大学）、平野順也先生（熊本大学）より、それぞれが取り組んでおられる教育・研究・社会活動をもとに提言がなされた。池田先生からは水俣病や四日市公害を語り継ぐ活動について、畠山先生からは長崎純心大学が取り組む、長崎に生きる責任ある市民として学生が考え、活動するための平和教育について、清水先生からは「プランゲ文庫」として保存・公開されている占領下で GHQ によって検閲されてきた文書を読み解く活動について、平野先

生からは戦争反対を訴える WDW@熊本の活動についての話題提供があり、支部の研究と社会との接点を探るディスカッションが展開された。

先生方のご発表で印象的だったことをそれぞれ挙げてみたい。池田先生のご発表のタイトルには、原田正純先生が水俣学の理念として挙げられた「現地に学び、現地にかえす」ということばが使われていた。研究は誰のためにするものなのかという、研究者にとって常に忘れてはならない原点が示された。研究のための研究であってはならない。当然のことだが繰り返し確認しなければいけない。畠山先生が用意された印刷資料の中に、長崎原爆資料館を訪れ、語り部講話を聴いた学生の手書きの感想文がいくつかあった。今どきの学生の少し頼りない丸い文字ではあっても、その手書きでつづられた言葉の数々には、学生の生きた学びや自分自身に引きつけて戦争の問題を捉えたことが、これを書いている時の胸に突き刺さるような思いも含めて見えた気がした。清水先生のご発表で初めて「プランゲ文庫」というものを知った。検閲により多くの言葉が削除されたことで、日

本人が自己批判をする手がかりが切断されてしまった。どこがどう削除されていたのかわかる資料が現在は Web でも公開されているとのこと。貴重な資料だ。それを今改めて読み解く活動が地道に行われている。平野先生は、「途切れ」と「切断」の違いを WDW@熊本の活動を例に示された。安保法案反対を掲げての運動はある意味緊急的なものであり、その活動期間には終わりがあった。しかし、戦争に反対し、平和を求めることに終わりはない。いったん活動が「途切れ」たとしても、切り離して終わり、ではなく、それをどう未来に接続していくのかさらに考えていかなければならない。若者たちが生きる今の世の中は、個人の小さな問題から社会の問題まで、実に多くの問題が拡大しており、拡大すればするほど細部が見えにくくなってしまふことが懸念される。未来につなげていくべき大切な問題に対する関心を、いかにつなぎとめていくのかという課題が投げかけられた。

この原稿は、目安として原稿用紙 2 枚分くらいと依頼されたが、この時点で既に原稿用紙 3 枚を超えてしまっている。もう少しお付き合いいただきたい。それだけ、私の中だけで留めておくにはもったいない時間だったのだ。

強者が弱者を支配するという構図は、水俣病

や戦争だけでなく、私たちの生きる社会のあらゆるところで姿を現し、また、形を変えては繰り返し我々に迫ってくる。それに気づきにくいのは、その不均衡な力関係が国家権力や大企業などだけでなく、我々自身が無意識にそれを成り立たせ、強化し、維持しているからなのだろう。そのことに立ち止まり考える時間をくれるのが、私にとっては九州、特に水俣なのだと思う。

2003 年の九州支部大会での原田正純先生の基調講演で、新潟水俣病のことを知った。四大公害病のひとつとしてではなく、今の私たちの問題として知った。新潟で育ちながら、ここまで何も知らずにいたこと、言うに言えない苦しみは今も抱えている方たちがすぐそばにどれだけいるか、ということに想像力を働かせなくても生活できてしまっていたこと、その不気味さへの気づきや恥ずかしさ、悲しみの混ざった複雑な思いは忘れえないが、慌ただしくも平穏な日々を過ごしていると、それも薄れてきてしまふ。

私にとっての故郷は新潟かもしれないが、研究者、教育者、そして人としての立ち位置を確認しに時々戻らなければならない場所が九州なのだろう。語り合い、つないでいく仲間が九州にいる。今年の支部大会は長崎だ。再会が今から楽しみである。

5)年次大会報告：九州支部パネルの感想

②「水俣から始まった『戦争』を考える九州支部でのシンポジウム」に関する所感：いま・ここを生きる指針となる歴史との邂逅

石黒 武人（順天堂大学）

私は、本パネルを通じて、「様々な社会の記憶・歴史について考えることは、我々がいま・ここを生きる指針になる」と感じた。そのような感覚を私にもたらした本パネルは、平野順也先生（熊本大学）、畠山均先生（長崎純心大学）、清水孝子先生（日本文理大学）、ならびに池田理知子先生（国際基督教大学）が、それぞれ、熊本における近年の学生運動とその継承、長崎における平和教育の実践、プランゲ文庫に見られる検閲の歴史、そして公害とその歴史を記録し、継承してきた人びとと学者のかかわり、というトピックについて発表され、その後、フロアと議論をするという形で進められた。一見、バラバラなトピックが羅列されたように見える本パネルの内容は、戦争、歴史、記憶、継承といったキーワードが結節点となり、つながりのあるメッセージとなって私に届き、冒頭で示したような感覚をもたらした。

まず、平野先生は、現代が、様々な情報の渦やかかわりのなかで、問題や個人の関心が埋もれやすい社会であり、学生たちが社会の改善を思い、はじめた活動も「途切れ」やすく、その思い・活動が継承されにくい状況にあると指摘

された。たしかに、私の認識世界のなかでも、社会の重要な問題や自身の純粋な関心、そして歴史が、日々の生活のなかで埋もれ、後景化される傾向にある、と痛感した。

つぎに、畠山先生による平和教育の実践報告では、原爆の悲惨さに触れた大学生たちの声を手書きのレポートで例示された。私のなかで、そのレポートの内容と過去の自分が瞬時につながり、長崎で受けた類似した教育の記憶が喚起され、日常に埋没し、後景されていた歴史と平和への思いが一挙に前景化され、平和に向けた日々の思考・行動が大切だと改めて思い直した。

さらに、清水先生からは、日本を占領した連合軍総司令部の民間検閲局が検閲した様々な表現媒体が保存された貴重な資料である「プランゲ文庫」を用いた、地域の歴史の検証と継承を行う大分での活動が報告された。プランゲ文庫の内容に触れる活動を通して、検閲という制限のなかで思いを表現した、もしくは思いを封印された地域の身近な先人たちの歴史とつながることができる。過去の記憶を継承するうえでの資料の重要性を実感した発表であった。

最後に、池田先生が水俣や四日市の公害の歴史を記録し、継承してきた人びとのお話をされ、ご自身の体験を踏まえて、現地の人びとと学者のかかわりについて言及された。四日市公害について膨大な資料を収集し残された澤井余志郎氏の「学者はいない」という発言が紹介され、資料を収集しに来るだけで現地と継続的なかかわりをもたない学者の例が示された。水俣病をテーマとされ、ご自身は水俣に引っ越しまでされた池田先生が紹介された「現地にまなび、現地にかえすこと」という言葉は、私のなかで

重く響き、発表を聞きながら、大学に身を置く一コミュニケーション研究者として「社会とどのようにかかわるのか」と問われた気がした。その問いを考究するうえで、本パネルで先生方にご共有いただいたような様々な社会の歴史と向き合うことで、自身のなかに立ち上がってくる生きる指針があると直感した。それはどうやら「学者」という立場で見いだせる指針という以上に、一人の人間として大切にしたい生きる指針といえるものである。



6)書評

池田理知子・伊藤三男(編) (2016、くんぷる)

『空の青さはひとつだけ：マンガがつなぐ四日市公害』

平野 順也 (熊本大学)

『空の青さはひとつだけ：マンガがつなぐ四日市公害』は、矢田恵梨子さんによるマンガ「ソラノイト～少女をおそった灰色の空～」で幕を開く。公害認定患者谷田尚子さんの9年という短い人生、そして彼女の「声」を「語り」を通して伝える母親の輝子さんの姿が描かれている。灰色の空が広がり「たまねぎのくさったようなにおい」が漂う街。激しい咳に苦しむ尚子さんに対して、祖母は石油化学コンビナートからの煙が原因だと説明する。コンビナートのおかげで、地域の経済は潤い、市民の生活も豊かになった。「体にわるいってわかっとなのに、なんで工場は止めてくれやんの？」と尋ねる尚子さんに対して、祖母はただ尚子さんを抱きしめ「ごめんしてな・・・」と言うことしかできない。

家族は尚子さんのため三重郡菰野町へ引越すが、その4カ月後に悲劇が訪れてしまう。マンガの後半は娘の早すぎる死に絶望しつつ、やがて尚子さんの「声」を一人でも多くの人々に届けようとする輝子さんの姿が描かれる。尚子さんの「声」は妖精のように輝子さんの側にあり、悲しみにくれる輝子さんを勇気づける過



程を、漫画家矢田さんは感動的につないでいく。物語の終盤には、2014年に開催された慰霊祭で小学生たちが作成した尚子さんについての絵本が朗読される場面が描かれる。尚子さんの「声」が失われることなく、小学生たちへと伝えられ、そして彼女たちもまた「語り」に参加するという、胸をうつ場面である。

マンガ「ソラノイト」は本書の第1部であり、全体の前半部であるといっていだろう。後半は3部から構成されている。第2部は輝子さんや矢田さんのインタビューや講演録が掲載され、第3部では四日市公害をグローバルな視点

から読み解く、そして最終部は水俣病とアスベスト問題を分析する。いわば、「ソラノイト」の「イト」で繋がっている人々や社会問題を再訪しているわけだ。本書は尚子さんの物語を源泉に、実に様々な場所へと読者を誘ってくれる。時にはマンガのコミュニケーションメディアとしての可能性が論じられ、時には社会問題の発信方法についても考察される。「公害」と地域や人々との関係が、漫画家、当事者、語り部、研究者、報道者といった様々な立場から論じられていく。読み進めると実際に「イト」をたどっていくような感じがしたのは、私だけではないだろう。人としてコミュニケーションを研究する者として、この「イト」をどのように繋いでいくかは私たちにも与えられた課題である。本書は研究者だけをターゲットにしてはおらず、どのような読者であっても側に感じられるように配慮されて構成されている(マンガには

註釈がついている)。社会問題を伝えるマンガとはどのようなものなのか、どうあるべきか、さらにはそれを制作するときに生じる問題や困難はなにか、また今後公害や「記憶」はどのように「語り」継がれていかななくてはならないか、といったことに興味がある方には、一度手に取ることを強く勧めたい。

読み終えた後、もう一度最初から読み始めた。水俣病に関する対談が本書の最後に掲載されているが、チッソに勤めたこともあり現在は水俣病患者支援を積極的に行ってきた山下善寛氏のそこでの言葉が胸に刺さったからだ。彼は、公害を取り巻く言説で多用されている「城下町」という表現を否定し、水俣市はチッソの「植民地」だと述べた。その言葉に導かれ再び「ソラノイト」を読んだとき、そこには違う世界が広がっていた。

7)編集後記 横溝 彰彦 (久留米工業高等専門学校)

私がニューズレターを担当して3回目の発行となりました。初回の27号が13ページ、2回目の28号が15ページ、そして3回目の今回は19ページ。ページ数を増やそうという意図はありませんでしたが、増量し続けています。「もしかして今号は九州支部ニューズレター史上、最もページ数が多いのでは!？」と思いましたが、2015年冬発行の25号は何と23

ページもありました。まだまだ先人には敵いません。次のメモリアル30号の発行に向けて、気持ちを新たにして企画を考えていきたいと思えます。何かご提案がございましたらお知らせください。末筆になりましたが、お忙しい中、原稿を引き受けていただいた執筆者の皆様に改めて感謝申し上げます。

発行元：

日本コミュニケーション学会 九州支部事務局

〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1

立命館アジア太平洋大学 教育開発学修支援センター 筒井久美子

電話：0977-78-1111 メール：kyushu@caj1971.com

URL： <http://www.caj1971.com/~kyushu/>
